『神奈川県立博物館研究報告（人文科学）』第四十六号　抜刷（二〇一九年十月）

【論文】

「神奈川県鳥瞰図」の作成過程と利用の実態

武田周一郎

【論文】

「神奈川県鳥瞰図」の作成過程と利用の実態

武田周一郎

【キーワード】
神奈川県観光連合会、吉田初三郎、神奈川県鳥瞰図、神奈川県観光図絵

【要旨】
「神奈川県鳥瞰図」は一九三二（昭和七）年に神奈川県観光連合会の委嘱を受けた吉田初三郎が作成した鳥瞰図である。神奈川県観光連合会は外客誘致の国策と呼応して観光施策を推進し、その宣伝資料として鳥瞰図を作成した。本稿では「神奈川県鳥瞰図」と、同図をもとにして発行された「神奈川県観光図絵」の作成過程を詳細に検討するとともに、これらの鳥瞰図の利用の実態を明らかにした。その結果、「神奈川県鳥瞰図」は博覧会で展示されて多数の来場者の目に触れ、また「神奈川県観光図絵」は神奈川県を訪れた視察団体や会議出席者などに贈呈されたほか、業者を通じた販売や、博覧会の来場者への配布などで大量に流通していたことが判明した。そして、両図は関東大震災から復興を遂げた神奈川県の姿を広く発信したが、その内容は必ずしも当時、県下に存在した観光名所だけに留まらず、湘南海岸道路や初声御用邸、富士箱根国立公園といった計画が含まれていた。

はじめに

「神奈川県鳥瞰図」（神奈川県立歴史博物館所蔵）は、一九三二（昭和七）年に神奈川県観光連合会の委嘱を受けた吉田初三郎が作成した鳥瞰図である。また、翌一九三三（昭和八）年には「神奈川県鳥瞰図」をもとにした印刷折本（パンフレット）の「神奈川県観光図絵」が発行された。この「神奈川県鳥瞰図」は長く神奈川県庁で保管されていたが、二〇〇六（平成一八）年に神奈川県立歴史博物館に移管されて現在に至っている[1]。

「神奈川県鳥瞰図」と「神奈川県観光図絵」の作者である吉田初三郎は、大正から昭和にかけて活躍した鳥瞰図絵師として知られている。吉田初三郎が作成した鳥瞰図については多くの研究があるが、そのほとんどは描かれた内容を分析したものである[2]。従来の研究によれば、吉田初三郎が作成した鳥瞰図の大半は交通機関の発達に伴う観光旅行の展開を背景として作成され、地域の観光名所が描かれている[3]。その一方で、観光の振興を目的として作られた鳥瞰図が、どのように利用されていたのかは十分に検討されてこなかった。吉田初三郎の鳥瞰図は各地で作成され、印刷物として大量に発行されたため、そこで紹介された観光名所の姿は人々の間で広く認識されたと考えられる。かかる観点では、近年、印刷技術の向上に伴い地図や写真などの印刷物が精緻になり、それらを通じて人々の地表空間に対する視覚的経験が多様化した様相が明らかにされている[4]。吉田初三郎の鳥瞰図もまた、人々の視覚的経験を多様化させた媒体の一つと位置づけられるが[5]、そのことを裏付けるためには、鳥瞰図の内容を分析するだけでなく、それらの利用の実態に着目する必要があろう。

ところで、本稿の分析対象である「神奈川県鳥瞰図」については、二〇〇七（平成一九）年に当館で開催された特別展「ようこそかながわへ―二〇世紀前半の観光文化―」に際して、鳥瞰図が作成された経緯を含めて、神奈川県観光連合会が展開した事業の内容が明らかにされている。[6] 本稿はその成果に拠るところが大きいが、「神奈川県鳥瞰図」に描かれた内容について分析されている一方で、「神奈川県観光図絵」の内容や、両者の利用の実態については十分に検討されていない。

そこで、本稿では「神奈川県鳥瞰図」と「神奈川県観光図絵」の作成過程を詳細に検討し、特にそれらの利用の実態を明らかにすることを目的とする。そのため、まず神奈川県観光連合会の動向と「神奈川県鳥瞰図」の作成過程を把握したうえで、描かれた県域の様相を検討する。続いて「神奈川県観光図絵」の作成過程とその内容を検討し、最後に「神奈川県鳥瞰図」と「神奈川県観光図絵」の利用の実態について明らかにする。

一　神奈川県観光連合会と「神奈川県鳥瞰図」

（1）「神奈川県鳥瞰図」の作成

「神奈川県鳥瞰図」が作成された昭和初期の神奈川県は、一九二三（大正一二）年九月一日に発生した関東大震災から復興を遂げる過程にあった。その間、一九二九（昭和四）年から一九三二（昭和七）年にかけて神奈川県知事を務めたのが山県治郎である。山県は前任者の池田宏知事と同様に、都市計画の専門家としてその基礎確立に注力した内務官僚である。山県は東京帝国大学法科大学の卒業後に内務省に入り、一九一二（大正元）年一二月から翌年六月にかけて神奈川県警察部長を務めるなどした後、一九二〇（大正九）年一二月に都市計画課長、一九二一（大正一〇）年一月に都市計画中央委員会委員となり、同年五月に内務省都市計画局の初代局長となった。その後、石川県、広島県、兵庫県の知事を経て、一九二九（昭和四）年七月から一九三二（昭和七）年一月まで神奈川県知事を務め、一九三六（昭和一一）年一月に没した。そして、山県知事が知事在任中に手掛けた主な功績として、財政整理、県営水道敷設、湘南海岸公園道路新設、箱根国立公園区域指定、丹沢御料林の下賜、外人招致・観光事業の普及などが挙げられる。[7]

このうち、観光政策を推進した団体が神奈川県観光連合会である。既に明らかにされているとおり、神奈川県観光連合会が設立された背景には、国策として外国人観光客の誘致を推進して国際収支の改善を図ろうとする動向があった。[8] 神奈川県観光連合会の活動は、同会の事業報告書である『神奈川県観光連合会要録』（横浜開港資料館所蔵。以下、『要録』とする）に詳述されていて、以下では主に同書の記述によって「神奈川県鳥瞰図」の作成過程を明らかにする。

まず、神奈川県観光連合会が設立されるまでの経緯を示すと、山県知事の着任後間もない一九二九（昭和四）年一〇月には第一回の外人招致策協議会が開催され、これに続いて、翌一九三〇（昭和五）年一月に神奈川県外人招致委員会が設置された。その第一回委員会での挨拶で、山県知事は神奈川県を「帝国ノ玄関口」と位置付けたうえで、それにふさわしい施設を整備するためには政府に対して県下一丸となって働きかける必要があると説いている。[9] さらに、同年四月には鉄道省に国際観光局が、五月には箱根に国立公園の実現を目指す大箱根国立公園協会が発足するなど、観光の振興を目的とした諸団体の設立が相次ぐなかで、一九三一（昭和六）年六月二三日に神奈川県観光連合会が創立された（表1）。同日、神奈川県庁では創立総会を兼ねた創立打合会が開催され、

山県知事が次のとおり挨拶した。[10]

我国現下の重要問題中多数公民が最も真剣に考究し、その解決を期待して居る緊急の問題は、国際貸借の改善と産業貿易の振興と、国民保健の増進とであらうと存じます。この見地より致しまして全国的の運動として外客誘致の国策が樹立せられ、又これに唱和して内外人の観光施設の改善が、時事問題として台頭致したものと見ることが出来ませう。

ここで端的に述べられているように、神奈川県観光連合会の設立は外国人観光客の誘致という国策に呼応するものであった。また、この創立打合会に続いて、八月一四日には鎌倉町の海浜ホテルで評議員と名誉会員による協議会が開催され、山県会長は自身が県知事として推進した湘南海岸道路（湘南公園道路）の計画と箱根の震災復旧の促進に理解を求めている。[11] 設立された神奈川県観光連合会は半官半民の団体であり、役員は会長に山県知事が、また副会長に県内務部長、箱根振興会長、湘南電気鉄道・京浜電気鉄道社長が就いたほか、官公署や実業界から理事や評議員が選出された。名誉会員、特別会員、通常会員からなる会員も同様であり、横浜商工会議所など実業界の諸団体や企業、交通機関、官公署の幹部らが加入した。

そして、「神奈川県鳥瞰図」作成の方針が決定されたのは、創立から約九ヶ月後の一九三二（昭和七）年三月一七日に開催された理事会と評議員会でのことであった。その際、協議事項のうち宣伝の実施に関する案件として、春季ポスターの調製と配布、「県下鳥瞰図等ノ件」が挙げられ、協議のうえで可決されている。[12] 同時に可決された昭和七年度予算

表１　「神奈川県鳥瞰図」の作成過程

年	月	日	事項
1931	6	23	神奈川県観光連合会（以下、観光連合会）が設立される
1932	3	17	観光連合会の理事会・評議員会で鳥瞰図の作成が可決される
	6	9	観光連合会が鳥瞰図の作成を吉田初三郎に委嘱する
	6	13	前田虹映が県内を実地踏査する（～15日）
	8	4	観光社の清水超太郎が神奈川県鳥瞰図を観光連合会に持ち込む
	8	11	東京湾要塞司令部と横須賀鎮守府の検閲手続きが完了する
	9	13	観光連合会の評議員会で神奈川県鳥瞰図の内容がチェックされる
	10	10	観光連合会の森川一郎が吉田初三郎のもとへ派遣され神奈川県鳥瞰図の修正等について打診する
	12	16	観光社の清水超太郎が神奈川県庁に印刷折本と表紙図案を持参する
1933	3	30	観光連合会の高橋書記が執筆した印刷折本裏面記事の原稿が完成し、観光社印刷部へ発送される
	4	8	印刷折本裏面記事の要塞地帯の写真掲載について軍部の許可がおりる
	4	16	印刷折本裏面記事の校正が完了する
	4	21	印刷折本12,000部が完成し観光連合会に到着する
	4	24	全国土木学会の視察旅行で配布のため、印刷折本70部が県道路課に贈呈される
	6	19	江の島の貝細工商である渡辺伝七ほか12名に印刷折本4,000部が発送される
	7	8	神奈川県鳥瞰図の表装と折畳式額縁が完成する
	7	23	大連市で開催の満州大博覧会（～8月31日）で印刷折本1,000部が配布される
	8	末	観光連合会が印刷折本の増刷等について吉田初三郎と協議する
	9	3	観光連合会が印刷折本10,000部の増刷を吉田初三郎に依頼する
	9	5	印刷折本の増刷に際して横須賀鎮守府の検閲手続きが完了する
	9	12	印刷折本増刷分の初校が観光連合会に届く
	12	28	印刷折本増刷分が完成する
1934	4	21	長崎市主催の国際産業観光博覧会（～5月23日）に出品のため神奈川県鳥瞰図が発送される
1935	4	10	箱根振興会主催の箱根観光博覧会（～6月8日）に神奈川県鳥瞰図が出品される
1936	2	7	観光連合会が印刷折本の販売代金納入について関係先に依頼状を発送する

（横浜開港資料館所蔵『神奈川県観光連合会要録』により作成）

書によれば、支出（計六、七二五円）のうち約三分の一にあたる二、二〇〇円が宣伝費に充てられていて、その対象はポスター、鳥瞰図、パンフレットその他であった。鳥瞰図とパンフレットのために確保された金額は不明であるが、相当額を見込んでいたと推測される。また、同年度の決算では二、五八二円五七銭と予算額の約二割増になり、総支出額（五、二六六円）の約五割が宣伝費に充てられていた。

以上のような過程を経て、「神奈川県鳥瞰図」の作成が着手された。[13] まず、一九三二（昭和七）年六月九日に神奈川県観光連合会は国内外の観光客を招致するにあたっての唯一無二の資料として、鳥瞰図の肉筆画[14]の揮毫と、それに基づく観光宣伝用の印刷折本の印刷を「斯道ノ大家」でありその「創業者」である吉田初三郎に委嘱した。すると、早くも四日後の六月一三日には吉田初三郎の弟子である前田虹映が県下の観光地をスケッチするため県庁に赴き、同日から三日間にわたり神奈川県観光連合会の藤原書記の案内によって県内を実地踏査した。調査にあたった前田虹映は本名を前田譲といい、一八九七（明治三〇）年に現在の山口県柳井市に生まれ、一九二一（大正一〇）年に吉田初三郎の門弟となった。一九三六（昭和一一）年に吉田初三郎が青森県八戸市へ拠点を移すと、前田虹映は独立して景勝宣伝社（後に景勝出版社）を拠点として鳥瞰図の作成を続け、一九四五（昭和二〇）年に没した。[15]

前田虹映による実地踏査で得られた情報をもとに鳥瞰図の作成が開始されたが、作業の進捗状況が芳しくなかったとみられ、七月二三日には神奈川県観光連合会が催促のため吉田初三郎に依頼状を発送している。その後、「神奈川県鳥瞰図」が完成し、八月四日には清水超太郎によって神奈川県観光連合会に持ち込まれた。この清水超太郎は吉田初三郎が興した観光社の人物であり、神奈川県内ではこのほかに鳥瞰図「小田原

図１
神奈川県鳥瞰図（神奈川県立歴史博物館所蔵。富士ゼロックス株式会社撮影）

市」の編集者としてその名が記載されている。なお、吉田初三郎は観光社やその前身である大正名所図絵社で、前田虹映ら複数名の画工と分業体制のもとで鳥瞰図を作成していたことが知られている。「神奈川県鳥瞰図」の作成にあたって吉田初三郎が具体的にどのような作業を行ったのかは明らかでないが、自身が全てを描いたのではない点に留意する必要がある。

ところで、完成した「神奈川県鳥瞰図」（図１）には三浦半島の要塞地帯が含まれていたため、関係機関からの許可が必要であった。完成翌日の八月五日には、要塞地帯の模写承認についての申請のため、観光連合会の川島理事と高橋書記が東京湾要塞司令部と横須賀鎮守府へ出張した。この申請に対して八日に承認がおりると、十一日には藤原書記が鳥瞰図を携帯して東京湾要塞司令部と横須賀鎮守府へ出張し、検閲済の手続きを完了させた。手続きにあたって鳥瞰図に「東京湾要塞司令部／７・８・１１／検閲済」、「横須賀鎮守府／７・８・１１／検閲済」の二種類の検閲印が押印されている。さらに、九月五日に印刷折本の印刷について東京湾要塞司令部に申請すると九日には承認された。

軍部による検閲に続いて、神奈川県観光連合会が内容のチェックにあたった。九月一三日に開催された評議員会で鳥瞰図の内容をチェックし、補正が必要な箇所についてはその修正方法を示した。そして十月十日には肉筆画の修正と上梓について、神奈川県観光連合会の特別会員である森川一郎が吉田初三郎のもとへ派遣された。『要録』によれば、一九三二（昭和七）年四月に神奈川県観光連合会は春季観光ポスターの調製を「森川商会」に依頼している。森川一郎はこの森川商会の人物と推測され、観光連合会の印刷業務に携わったと考えられる。修正の要望は一度に留まらず、一〇月二七日には肉筆図を再修正のうえ鉄路で吉田初三郎

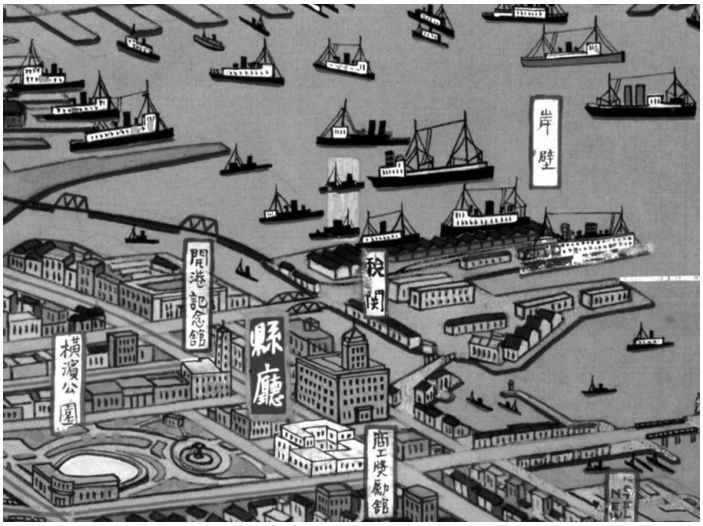

図２　神奈川県鳥瞰図　修正箇所（横浜港）

のもとへ発送されると、これらの修正案に基づいて補筆が施された。この修正箇所については、例えば横浜港の新港埠頭に白地の名称枠を消した痕がある（図２）。同様の痕跡がある地物として画面中央の飯山観音（現・厚木市）があるほか、画面左の箱根では元箱根の周辺に名称枠を消した痕が複数認められる。さらに、大雄山鉄道線や大山のケーブルカーについては他の鉄道とは異なる名称枠が用いられていて、完成当初とは異なる段階で加筆された可能性が考えられる。

（２）「神奈川県鳥瞰図」に描かれた県域

神奈川県観光連合会のチェックを経て完成した「神奈川県鳥瞰図」は、当初の大きさで縦三尺（約九一センチメートル）、横三間（約五四五センチメートル）に及ぶ長大な鳥瞰図であった。後述のとおり一九三三（昭和八）年に表装が施されたが、画面に変形を起こしていたため二〇一七（平成二九）年に修復してこれを除去し、現状では本紙が縦八三・四センチメートル、横四一七・一センチメートルとなっている。

画面は継ぎがない一枚の絹地であり、顔料を膠で溶いたものと推測される絵具で描かれている。画面左上隅には「神奈川県鳥瞰図」という図名と、「初三郎作」及び「よしだ」（朱字）の署名がある。また、画面右下隅には東京湾要塞司令部と横須賀鎮守府の検閲印が押印されている。先述のとおり、双方とも日付は一九三一（昭和七）年八月一一日である。

画面の構成は右に東京から川崎、横浜が、左に小田原や箱根があり、中央部には湘南と三浦半島が配置されている。また、地形の描写については多摩丘陵から三浦丘陵にかけての一連の丘陵地帯を淡い緑で、県央部を南流する相模川周辺の相模原台地を淡い黄色で示すとともに、丹沢山地や箱根山地などの山地は起伏を強調して表現している。そして、県域を左右に貫く東海道本線をはじめとする鉄道網や、横浜と海外を結ぶ国際航路が描かれ、神奈川県の観光を支える交通網が整備された様子がうかがえる。当該期に開通した主な鉄道として、一九二七（昭和二）年開通の小田原急行鉄道や東京横浜電鉄のほか、小田急藤沢線や南部鉄道（一九二九年）、湘南電鉄（一九三〇年）などがある。また道路では一九三一（昭和六）年に箱根の国道一号で函嶺洞門が完成していて、「神奈川県鳥瞰図」にはこれらの交通網が描き込まれている。

画面に書き込まれた地名などの記載は四〇〇か所を超え、これらはいくつかの記号と色によって書き分けられている。例えば、観光名所は長方形枠で、県庁をはじめとする主要なものは青地と朱地、一般的なものは白地である。同様に駅名は楕円枠であり、横浜をはじめとする主要な

ものは青地で、そのほかは白地である。また、黄緑地の長方形枠には英語表記で地名が記載されている。これらの地物のなかで、画面のほぼ中心部に位置する相模川の河口部には、「湘南パークウェー」及び「SHONAN PARK WAY」と表記された湘南公園道路が描かれている（図3）。この湘南公園道路は山県治郎知事が在任中とりわけ注力した事業の一つであり、伝記には県営水道、丹沢山開発とともに「三大事業」として挙げられている。[16] この湘南公園道路は、鎌倉郡川口村片瀬から中郡大磯町に至る府県道片瀬大磯線であり、恐慌下の失業救済対策として一九三一（昭和六）年度から三か年の継続事業として計画された。[17] その意義について、山県知事は次のように記している。[18]

> 此の地方は本県下に於ても風光最も明媚にして気候温和、住宅地、別荘地として最も好適の場所である。然るに現在の東海道国道は海岸を去ること遠く、（中略）片瀬大磯間四里余に渉る数百万坪の絶好なる住宅地も交通不便の為め、全くその発達を阻害せられ徒に天与の宝物を死蔵するに等しき感があるのである。茲に於て片瀬龍口寺前を起点とし江の島の翠影を左方に眺め青松白砂の長汀を走り相模川を渡りて大磯に於て国道に合する新線路を開拓する計画を樹てたのである。

そのうえで、湘南公園道路が出来れば、湘南地方には住宅地・別荘地が形成されて東京や横浜方面からの移住者が増え、箱根と逗子・鎌倉が結ばれて「外人招致の国策振興の一助」となるとしている。

湘南公園道路の建設が始まったのは、「神奈川県鳥瞰図」が作成される以前の一九三〇（昭和五）年のことであった。神奈川県土木部が実地測量と設計に着手し、一〇月に成案すると、一九三一（昭和六）年五月

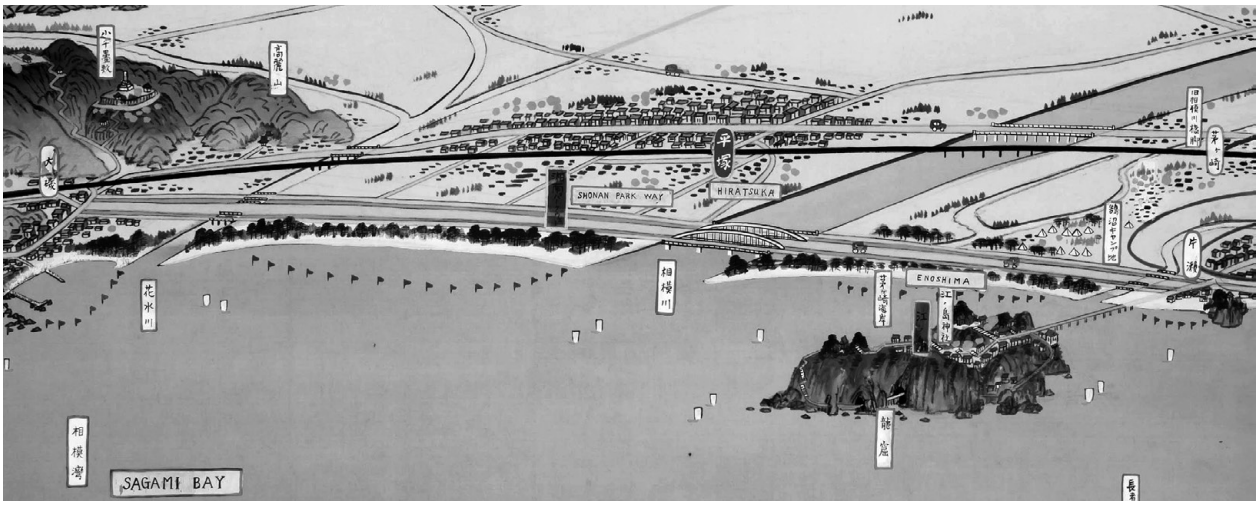

図３　神奈川県鳥瞰図　湘南公園道路周辺

には内務省へ実施設計の認可を申請し、これに対して認可がおりた。そして同年八月に起工式があり、延長約一七キロメートル、幅員一二メートル、総予算額一二〇万円の大工事が始まり、一九三五（昭和一〇）年七月には相模川に架かる湘南大橋を除く区間が一般開放され、一九三六（昭和一一）年一〇月に開通式が行われた。

既に確認してきたように「神奈川県鳥瞰図」の作成にあたって実地踏査が実施されたのは一九三二（昭和七）年六月のことであり、最終的に修正が施されて完成したのは同年一〇月以降であった。当時、湘南公園道路は完成していなかったものの、「神奈川県鳥瞰図」の相模川河口部には湘南大橋が描かれている。既に山県知事は一九三二（昭和七）年一月に退任しているが、湘南公園道路は山県知事が主導した事業を象徴するものとして描かれていたと捉えられよう。

二　「神奈川県観光図絵」の作成と内容

（1）「神奈川県観光図絵」の作成

一九三二（昭和七）年六月に着手された「神奈川県鳥瞰図」は同年八月に完成した。その後、神奈川県観光連合会によるチェックを経て十月から修正が施されると、続いてこの肉筆画をもとして印刷折本の作成が始まった。その構成は、表紙、肉筆画をもとにした鳥瞰図、その裏面の記事である。十二月一六日には観光社の清水超太郎が神奈川県庁へ肉筆画をもとにした印刷折本と、表紙の図案を持参した。描かれた表紙の図案は東海道を背景にした旅姿の女性（図4）であり、その背景は歌川広重（初代）の「東海道五拾三次之内　神奈川　台之景」をモチーフとしたもので、「大正の広重」として自他ともに認める吉田初三郎らしいデザインといえる。神奈川県観光連合会では神奈川県を象徴するのにふさ

わしいものとして、その採用を決定した。

あわせて表紙裏面に印刷される神奈川県下の英文交通図や、裏面の記事の作成などといった諸般の事務準備が進められた。鳥瞰図裏面の記事については、神奈川県観光連合会の高橋茂書記が起草に着手し、県下の名勝旧蹟などの関係資料の収集と考証に努めたが、県下の名勝旧蹟が広範囲にわたるのに対して紙数が限られるために苦慮し、想定よりも多くの日時が費やされた。以上の手続きを経て裏面記事の準備が完成したのは三月三〇日のことで、即日、吉田初三郎が経営する京都市内の観光社印刷部宛にこれらの原稿が発送された。

また、印刷折本の裏面には要塞地帯の写真が掲載されていたため、四

図４　神奈川県観光図絵　表紙（個人所蔵）

図５
神奈川県観光図絵（個人所蔵）

月六日に掲載の承認について軍部に申請すると、四月七日・八日には許可が下りた。[19] 続いて四月一二日には裏面の記事の校正について、観光社に電報で連絡をした。これに対して、四月一六日には裏面記事が観光社から観光連合会に到着したため、高橋書記と藤原書記が校正したうえで、観光社へ戻した。当日は日曜日であったが両者は出勤して作業にあたり、これをもって校正は完了した。そして、校了から五日後の四月二一日に、パンフレット一二、〇〇〇部が完成し観光連合会に到着した。

（2）「神奈川県観光図絵」の内容

肉筆画である「神奈川県鳥瞰図」とそれに基づいて印刷された「神奈川県観光図絵」（図5）を比較すると、後者だけにあるのが裏面の文章である。その文末には「S・T稿」とあり、先述のとおり観光連合会の高橋茂書記が執筆したものである。

文章の構成は冒頭に「神奈川県概観」を記したうえで、「横浜市及び川崎市方面」、「三浦半島方面」、「湘南地方」、「箱根地方」、「中部地方」、「津久井渓谷地方」の六地域に分けて、それぞれ項目が列記されている。

神奈川県概観

裏面文章の冒頭に置かれた「神奈川県概観」では、神奈川県の概要を位置、面積・人口、行政区画、気候、貿易・商工業、社寺宗教、特産品の七項目に分けて記述している。まず、神奈川県を「到る処風光よく史蹟名勝に富み、まことに全日本観光地の王座を占めてゐる観がある」と位置づけ、気候の項では「空気の清澄は稀に見るところ、本県の気候が如何に諸人に適順であるかは説明を要しない」とする。また、貿易・商工業の項では「本県経済上の重点は何と云つても対外貿易と商工業に置かれる」として、商業は「頗る殷盛であつて、災前に増して活気を呈してゐる」と関東大震災から復興した様子を記す。そして、特産品の項では絹手巾（ハンカチ）、シャツ類、卓子掛（テーブル掛）、絹毛靴下、漆器、絵付陶器、箱根細工、鎌倉彫、眞葛焼、貝細工、ハム及びソーセージ、麦酒、乾海苔、奈良漬、白酒、味の素、小田原名産諸食料品、煎餅、蜜柑、梨、桃を挙げる。これらの記述に加えて、新築間もない神奈川県庁の写真を掲載する。

横浜市及び川崎市方面

横浜、大桟橋、三渓園、金沢文庫、金沢八景、川崎、川崎大師、扇島海水浴場、多摩の清流、久地の梅林、稲田堤の桜、川和の菊の一二項目が挙げられる。このうち金沢文庫は一九二八（昭和三）年に神奈川県立の施設として設置されたばかりであった。また、特色あるところでは海や川の遊泳場として扇島海水浴場や多摩の清流が、花の名所として久地の梅林、稲田堤の桜、川和の菊が記載されている。

三浦半島方面

三浦半島の概要のほか、憲法起草遺跡記念碑、横須賀軍港、軍艦三笠、三浦安針の墓、浦賀、走水神社、ペリー上陸記念碑、南北下浦、三崎、城ヶ島、西浦、葉山、逗子、神武寺の一五項目が挙げられる。なお、裏面文章には挙げられていないが、図中には三浦半島先端部の相模湾に面した位置に「初声御用邸敷地」がある。この初声御用邸は関東大震災後の御用邸再編の動向を受けて、三浦半島西岸の小網代湾一帯を予定地として計画されたものであり、一九二九（昭和四）年三月に候補地が選定されたが、その後、計画は中断されて実現に至らなかった。[20]

湘南地方

「本邦観光地の代表的名邑である」鎌倉に所在するものとして、鶴岡八幡宮や鎌倉宮、建長寺、半僧坊、円覚寺、長谷大仏といった寺社のほ

か、由比ケ浜が挙げられる。鎌倉以外の地域の項目に、柏尾川堤の桜、大船、藤沢、藤沢ゴルフリンクス、江の島、茅ヶ崎・旧相模川橋脚、大岡越前守忠相墓、寒川神社、平塚、湘南パークウエー、大磯、鴫立庵と虎子石、千畳敷、高麗山、国府津、小田原、小田原城址、御幸ヶ浜海水浴場、平成輔卿墓、報徳二宮神社があり、湘南地方全体で合計二八項目に及ぶ。このうち、江の島の説明には全項目中で最も多い九行が費やされている。後述のとおり、「神奈川県観光図絵」の販売者の一人に江の島で貝細工商を営む渡辺伝七がいた。確かに江の島は神奈川県における主要な観光地の一つであるが、「神奈川県観光図絵」で特に厚く記述された理由として、販売者への配慮があったと推測される。そして、「湘南パークウエー」として湘南公園道路について以下のとおり記されている。

この観光道路は神奈川県の誇りの一つで、世界に類の少いもの。片瀬龍口寺の前から大磯まで、所謂湘南海岸の風光をほしいまゝにしながらドライヴアーは自動車道を、散歩者は遊歩道路を夫々疾走、漫歩が出来る。各種の平行道路間は美しい緑樹帯で飾られる。昭和六年十月の起工、工費三百余万円、坦々十六キロ、完成の日が待たれる

このように、図面では中央部に一際存在感のある相模大橋を配置し大きく取り上げられた湘南公園道路（図6）は、未完成であったにもかかわらず「世界に類の少いもの」と高く評価されている。

箱根地方

箱根の概要のほか、湯本、塔の沢、宮の下、底倉、堂ヶ島、木賀、強羅、小涌谷、芦の湯、仙石原、姥子の各温泉や、芦の湖、箱根権現、杉

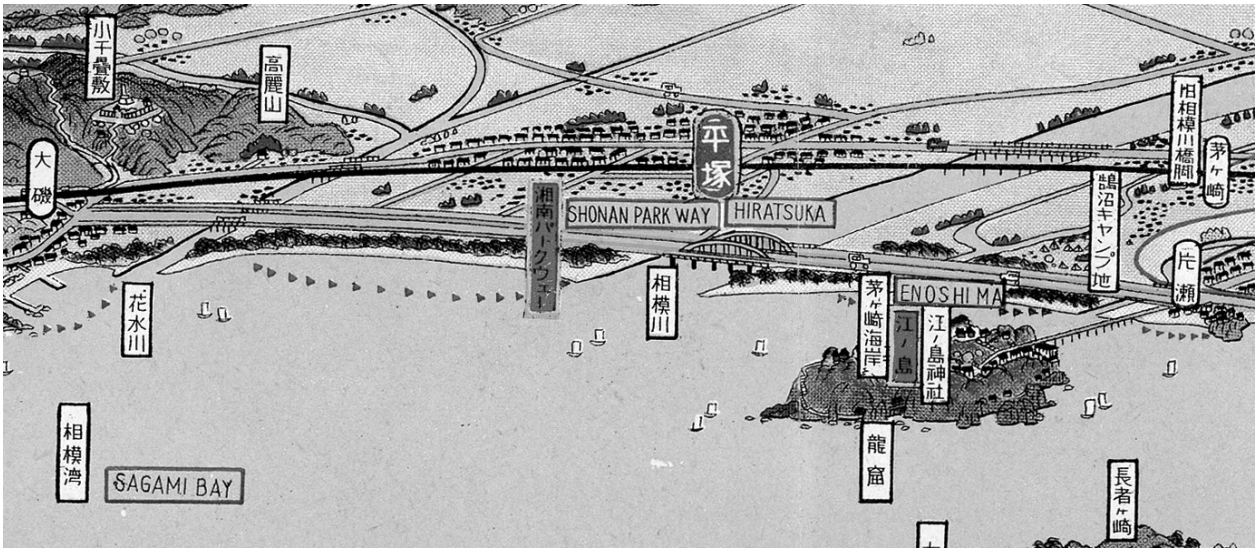

図６　神奈川県観光図絵　湘南公園道路周辺

並樹・関所跡、湯河原温泉、真鶴、道了山の計一八項目が記載される。そして、文中では「新に外客の所謂『フジヤマ』と共に国立公園の指定をうけた我等の箱根」と紹介され、図中では箱根一帯のほぼ中央に「国立公園」と表記されているように、国立公園の存在が強調されている。しかし、実際には「神奈川県観光図絵」完成の約半年前である一九三二（昭和七）年一〇月に富士・箱根が国立公園の候補地の一つに選定された状況であり、正式な指定には至っていなかった。富士箱根国立公園として指定を受けたのは一九三六（昭和一一）年二月であった。[21]

中部地方

中部地方として記載された対象地域は、現在の県央地区に該当する。厚木の鮎漁、国分寺趾（現・海老名市）、日本武尊御遭難地（現・厚木市）、太田道灌の墓（現・伊勢原市）、大山の五項目が取り上げられていて、史蹟の比重が高い。また、大山の項目では「小田急沿線地方には日向薬師、飯山観音、善波山、鶴巻温泉など見るべきところが少なくない」として、周辺の名所を挙げている。

津久井渓谷地方

津久井の渓谷下り、城山、久所河原の三項目が記載されている。このうち、城山の項目では「鼠坂関所跡、小仏峠、美女谷温泉、石老山、陣馬山、八丁滝、大滝、其他津久井の中心中野町、上流の吉野町等訪ふべき所も多い」として、周辺の名所を挙げている。

三　「神奈川県鳥瞰図」と「神奈川県観光図絵」の利用

（1）視察団体への配布

完成した印刷折本の「神奈川県観光図絵」は、早速に各方面へ配布された。『要録』に掲載された「日誌」によれば、その最初の配布先は全国土木学会であった。全国土木学会は一九三三（昭和八）年三月二〇日の役員会で視察旅行について協議し、五月六日と七日に丹那トンネルと箱根自動車道を視察すること、また詳細については神奈川県土木部長の田辺良忠と鉄道省熱海線建設事務所長の平山復二郎と打合せをすることを決定した。[22]その後、視察の受入先である神奈川県・静岡県・鉄道省熱海建設事務所との打合せの結果、四月二四日の役員会で視察旅行の実行案を決定した。[23]すると、同日に神奈川県では道路課がこの視察旅行にあたって「神奈川県観光図絵」の寄贈を神奈川県観光連合会に依頼し、これを受けて道路課に七〇部が贈呈された。[24]

そして、五月六日に横浜駅に集合した一一二名の参加者には「参加記章や神奈川県、鉄道省等より寄贈のパンフレット」が配布されたが、このなかに「神奈川県観光図絵」が含まれていたと推測される。[25]この視察旅行の行程は二日間にわたり、まず横浜から国道一号を通って小田原から熱海に至って同所で一泊し、翌日は熱海峠を越えて三島を訪れた後に箱根へ戻って塔ノ沢に至るというものであった。初日は保土ヶ谷から戸塚、藤沢、茅ヶ崎を通り、相模川の河畔で関東大震災によって隆起した旧相模川橋梁の橋脚を見学した。これは「神奈川県観光図絵」に「旧相模川橋脚」として記載されているもので、裏面の案内文には次のように紹介されている。

> 空気の清澄を以て知らるゝ茅ヶ崎は避暑避寒に適する好箇の別荘地帯、又その海水浴場は百パーセントのものである。珍らしい一つの史蹟がこの町に発見された。日本最古の橋脚である。源頼朝の臣稲毛三郎重成が建久年代の相模川に設けた橋脚で、震災の際露出したのである。史蹟指定は昭和二年、駅より西へ十町、国道左側。

このように、関東大震災で隆起した旧相模川橋脚は神奈川県観光連合会が史蹟の一つとして宣伝したものであった。その後、一行は国道一号を通って小田原に至った。それまで砂利道であった国道一号はコンクリート舗装と拡幅の工事が完成を迎える頃にあり、特に視察旅行参加者の関心を集めたのが沿道の松並木を保存する試みであった。会誌の視察旅行記では、戸塚―藤沢間の松並木保存箇所などを図示しながら、「斯様に道路を小庭園化し風致を計りたる当りは到底東京市内では味ふ事は出来ない。東京横浜から箱根国立公園に至るアプローチ・ロードとして実に相応しい試みと感心した」と、松並木を活かした道路工事を評価している。かかる反応は先述した神奈川県による湘南開発の意図をふまえたものであり、「神奈川県観光図絵」等の資料を利用した県道路課による宣伝効果が発揮されたと捉えられる。

その後、一行は小田原を経由して湯河原と熱海を結ぶ泉越隧道の修築工事を見学して熱海に宿泊し、翌七日に丹那隧道の視察へ赴いた。旅行記では同所が「学界並に社会的にも非常な興味の的となつて居る」と表現しているが、「学界」側にあたる視察者らは工事の経過や現況に関心を寄せ、熱海建設事務所長の平山復二郎から掘削等の工事状況や地質について説明を受けている。一方で、丹那トンネルは名所案内に掲載されたことで、「社会的」な関心が喚起された。熱海建設事務所による『丹那トンネルの話』[26]には次の記述がある。

熱海の名所案内を見ると『丹那トンネル迄七丁』等と出て丹那トンネルは、もうすつかり名所の中に挙げられて居ります。或る日、工事に全く素人の人が紹介も無しにいきなりトンネルを見せて呉れと言ふので、只さへ参観者の多い所にかう云ふ面白半分に来る人は甚だ困りますから、断りますと『丹那トンネルは名所の一に載つて居るぢやないか、その名所を見せないとは怪しからん』と威丈だかに怒鳴られて詰所の猛者連も呆気にとられたこともあります。劇しいのになると宿屋から電話で丹那トンネルの入場料はどの位ですかと問合はせて来たのがあります。

すなわち、熱海の名所案内をみて市民が丹那トンネルを見学しに来ていた状況が分かる。ここで、丹那トンネルの名所としての知名度を挙げる契機となった媒体は、あくまで「熱海の名所案内」である。「神奈川県観光図絵」での丹那トンネルの扱いはそれほど大きくはない。「神奈川県観光図絵」を確認してみると、印刷折本初版が発行されたのは丹那トンネルの開通以前である一九三三（昭和八）年のことであったが、丹那トンネルについて文字情報による記載こそはないものの、熱海から三島へ至る路線とともにトンネルが図示されている。また、一九三三（昭和八）年三月に神奈川県観光連合会は鉄道大臣に対して、丹那トンネル開通後、小田原駅に急行列車が停車するよう陳情している。[27]「神奈川県観光図絵」では丹那トンネルは主たる地物として描かれていないため、その名所化に果たした役割は限定的である。しかし、その他の地物については、前掲の丹那トンネルの逸話が示すような社会的な影響が少なからずあったと推測される。

（2）「神奈川県観光図絵」の配布・販売と増刷

以上のように、「神奈川県観光図絵」の最初の活用事例は、全国土木学会の視察旅行であり、県道路課はこの好機に県下の道路整備状況を広

表２　「神奈川県観光図絵」の配布先

年	月	日	配布先	目的	部数	備考
1933	4	24	全国土木学会の視察旅行参加者	視察	70	県道路課が依頼
	4	25	甲府商工会議所議員	視察	8	
	5	19	関東市農会長協議会の出席者	会議	50	横浜市主催
	5	27	領事団	観光	120	
	7	23	満洲大博覧会の来賓・地域有力者	博覧会	1,000	
	8	24	関東副業主任会議の出席者	会議	19	県農務課主催
	11	1	キリスト教女子青年会幹部総会に出席の外国人	会議	30	
	11	10	内務省土木出張所長	―	5	
1934	4	2	精神作興会に出席の県下小学校長	会議	12	
	4	24	日本耕地協会関東一府六県総会の出席者	会議	40	県主催
	7	27	内務省警察講習所の生徒	視察	200	
	9	10	県経理課	―	300	実費で頒布
	11	27	満洲国実業団	視察	30	
1935	1	11	東京湾要塞司令部・横須賀鎮守府	検閲	12	6部ずつ
	4	10	箱根振興会	宣伝	50	
	4	12	関東蚕業取締所長会議・蚕糸業連盟総会の出席者	会議	100	
	4	19	復興記念横浜大博覧会の来賓	博覧会	400	横浜市電気局が依頼
	4	25	復興記念横浜大博覧会の来賓（神奈川館）	博覧会	15	絵葉書
	4	25	全国県会議長会議の出席者	会議	130	県主催
	4	30	関東東北桑苗組合連合会総会の出席者	会議	45	
	5	1	全国産業協議会の出席者	会議	110	横浜市主催
	5	3	全国都市産業協議会の出席者	会議	110	横浜市主催
	5	4	全国市長会議の出席者	会議	250	横浜市主催
	5	6	神奈川県山林会の出席者	会議	65	
	5	7	全国港湾関係者会合の出席者	会議	1,400	県主催。県河港課に実費で頒布
	8	15	全国工業専門学校化学担任教官協議会の出席者	会議	40	
	11	23	東京警察講習生	観光	80	
合計					4,691	

（横浜開港資料館所蔵『神奈川県観光連合会要録』により作成）

報するために「神奈川県観光図絵」を活用した。そして「神奈川県観光図絵」の活用法として、全国土木学会をはじめとする視察団体や、県下で実施された会議の参加者へ配布する事例が確認できる（表2）。一九三三（昭和八）年四月二五日には甲府商工会議所議員（八名）、五月一九日には横浜市が主催する関東市農会長協議会の出席者（五〇名）、五月二七日には大船のシャクヤクを観覧した領事団（一二〇名）に「神奈川県観光図絵」が配布された。さらに、八月二四日には神奈川県農務課が主催する関東副業主任会議出席者（一九名）に「神奈川県観光図絵」やパンフレットが贈呈された。また、一一月一〇日には内務省土木出張所長に五部贈呈されているが、これも先に挙げた全国土木学会と同様に、県内の都市整備事業を広報する目的で配布されたものであろう。

このように神奈川県観光連合会は「神奈川県観光図絵」を視察団体や会議参加者へ配布したほか、業者を通じて広く販売した。一九三三（昭和八）年五月二〇日に観光連合会は渡辺伝七ほか一七名に対して、「神奈川県観光図絵」の販売に関する文書を発し、六月一九日にはその渡辺伝七ほか一二名に対して「神奈川県観光図絵」四、〇〇〇部を発送した。先述のとおり、渡辺伝七は江の島で貝細工商を営む人物であり、この渡辺を大口の販売者として考慮したためか、「神奈川県観光図絵」裏面の案内文では江の島の項目がほかよりも手厚く記述されていた。

さらに、七月二三日から八月三一日まで大連市で開催された満州大博覧会で、神奈川県観光連合会は来賓と地域有力者一、〇〇〇名に対して「神奈川県観光図絵」を配布した。博覧会の入場者は約四七万人に及び、神奈川県が設けた特設館には国立公園箱根全山の大パノラマ模型が置かれ、約四〇種、六、五〇〇点に及ぶ県下の特産品が出品された。出品されたのは主に輸出向けの特産品であり、「蝶貝、青貝等を鏤めたる彫

刻漆器大屏風、衝立、輸出向刺繍きもの、ドロンウオーク卓子掛、象牙細工」などが入場者の注目を集め、また、箱根の木工細工は開会数日で売り切れ、卓子掛類は相当量の商談が成立した。[28]

また、一九三四（昭和九）年度では配布部数の多いものとして、七月二七日の内務省警察講習所生徒（三〇〇名）の事例があるほか、九月一〇日には県経理課へ実費で三〇〇部を頒布している。

このように「神奈川県観光図絵」は順調に配布された結果、残部が僅少になったため増刷されることになった。八月末に神奈川県観光連合会は「神奈川県観光図絵」の増刷と、「風光絵葉書原画」の揮毫について吉田初三郎と協議すると、[29]九月三日には「神奈川県観光図絵」一〇、〇〇〇部の増刷を依頼した。その際、地図や記事、掲載写真といったパンフレットの内容について修正が加えられ、その原稿が発送されている。また、同日には増版に際しての要塞地帯の模写について、東京湾要塞司令部と横須賀鎮守府に対して承認を申請すると、九月五日には横須賀鎮守府から承認された。九月一二日には印刷初校が届き、一二月二八日に増版分が完成したため、一九三五（昭和一〇）年一月一一日には、東京湾要塞司令部と横須賀鎮守府に六部ずつ発送した。

（3）「神奈川県鳥瞰図」の展示とその後の動向

これまでに確認したとおり、印刷折本の「神奈川県観光図絵」は神奈川県観光連合会に納品された一二、〇〇〇部のうち四、〇〇〇部が販売に回されたほか、県内を訪れた視察団体などに配布された。一方、肉筆画の「神奈川県鳥瞰図」については各地の博覧会や展覧会で展示するため、また保存のために、表装を施すとともに折畳式の額縁を作り、その活用が図られた。神奈川県観光連合会はこれらの作業を一九三三（昭和八）年六月二九日に神奈川区反町の鈴木忠治郎に依頼し、七月八日に出来上がった。

すると、展示活用の準備が整えられた「神奈川県鳥瞰図」は、長崎市が主催する国際産業観光博覧会に出品された。[30]同展覧会は一九三四（昭和九）年三月二五日から五月二三日にかけて開催されたものであり、「神奈川県鳥瞰図」は四月二一日に発送され、第二会場の雲仙国立公園で展示された。その際、組立式の額縁が使われている。あわせて同展には「風光写真額」八枚が展示された。その内訳は、横浜三渓園、横浜港、長谷大仏、鎌倉八幡宮、江の島、箱根芦の湖、箱根宮の下、ペリー上陸記念碑であった。なお、六〇日間に及ぶ会期を通じて、観覧者は約六三〇、〇〇〇人であった。[31]

また、一九三四（昭和九）年二月四日には「神奈川県観光図絵」の増刷分とともに吉田初三郎が依頼を受けた風光絵画が完成した。これは絵葉書の原画で縦二尺五寸、横一尺五寸で、春の江之島、夏の宮之下、秋の仙石原、冬の鎌倉、神奈川県庁の五点であった。これらの風光絵画は「神奈川県鳥瞰図」や風光写真額一〇枚とあわせて、一九三五（昭和一〇）年開催の箱根観光博覧会に出品された。[32]この博覧会は同時期に開催された復興記念横浜大博覧会とともに、関東大震災からの復興を記念して行われたものであり、箱根振興会が主催して四月一〇日から六月八日にかけて開催され、約五二、〇〇〇人の観覧者を集めた。[33]箱根観光博覧会に出品されたのは「神奈川県鳥瞰図」のほか、風光絵画五点、風光写真額一〇点である。同様に復興記念横浜大博覧会では四月二五日に神奈川館の来賓一五名に対して「神奈川県鳥瞰図絵」が贈呈された。以上のとおり、「神奈川県鳥瞰図」と「神奈川県鳥瞰図絵」は震災復興を記念した両博覧会で、来場者に対して復興を遂げた神奈川県域の様子を示し

た。

その後、一九三五（昭和一〇）年にも各種団体に「神奈川県鳥瞰図絵」が配布されている。一例を挙げれば、四月二五日に開催された神奈川県主催の全国県会議長会議出席者一三〇名や、五月一日に開催された横浜市主催の全国産業協議会出席者一一〇名に「神奈川県観光図絵」が配布された。同年の場合は箱根振興会や復興記念横浜大博覧会を除くとほとんどが会議の出席者を配布対象としていて、一一月二三日に東京警察講習生（八〇名）が箱根旅行に際して「神奈川県観光図絵」を贈呈されている事例が観光を主目的とした配布事例であった。

おわりに

本稿では「神奈川県鳥瞰図」と、同図をもとにして発行された「神奈川県観光図絵」の作成過程を詳細に検討するとともに、これらの鳥瞰図の利用の実態を明らかにした。神奈川県観光連合会の事務報告書によれば、肉筆画である「神奈川県鳥瞰図」は博覧会で展示されて多数の来場者の目に触れ、また印刷折本の「神奈川県観光図絵」は神奈川県を訪れた視察団体や会議出席者などに贈呈されたほか、業者を通じて販売されたり、博覧会の来場者に対して配布されたりして大量に流通していたことが判明した。そして両図は展覧会での展示や印刷物としての配布を通じて、関東大震災から復興を遂げた神奈川県の姿を広く発信した。その内容は必ずしも当時、県下に存在した観光名所だけに留まらず、湘南海岸道路や初声御用邸、富士箱根国立公園といった計画が含まれていた。

従来、吉田初三郎が作成した鳥瞰図の分析は描かれた内容の分析が中心であったが、本稿では利用のあり方に着目した結果、鳥瞰図が単に観光という文脈だけで利用されていなかったことが指摘できる。すなわち、印刷折本は土木、港湾、農林業、商工業、行政、教育、警察など様々な分野の関係者に配布され、観光に留まらず神奈川県が推進していた施策について幅広く宣伝する役割を担ったと位置づけられよう。一方で、本稿では鳥瞰図の作成主体である神奈川県観光連合会の側からの検討に終始したため、鳥瞰図が発信した情報がいかに受容されたのかについては十分に分析できなかった。この点については、今後の課題としたい。

付記

図1は富士ゼロックス株式会社から提供を受けました。記して感謝いたします。また、本研究はＪＳＰＳ科研費一九Ｋ一三四五一、同一九Ｋ〇一一四九の助成を受けたものです。

註

（1）寺嵜弘康「吉田初三郎『神奈川県鳥瞰図』について　特別展『ようこそかながわへ―二〇世紀前半の観光文化―』の出品作品から」『神奈川県立歴史博物館だより』一七四号、二〇〇七年。

（2）吉田初三郎の鳥瞰図を総体的に取り上げた研究として、堀田典裕『吉田初三郎の鳥瞰図を読む　描かれた近代日本の風景』河出書房新社、二〇〇九年、などがある。また、吉田初三郎の鳥瞰図を網羅的に紹介した著作として、湯原公浩編『別冊太陽　大正・昭和の鳥瞰図絵師　吉田初三郎のパノラマ地図』平凡社、二〇〇二年、などがある。

（3）「神奈川県鳥瞰図」と同様に県全体を主題とした鳥瞰図を分析した研究として、関戸明子「吉田初三郎の鳥瞰図に描かれた信州の温泉」（長野県立歴史館編・発行『観光地の描き方　浮世絵版画から観光パンフレットまで』二〇一一年）、などがある。また、植民地を主題とした鳥瞰図を分析した研究として、中西僚太

郎「近代の鳥瞰図に描かれた朝鮮半島―吉田初三郎『朝鮮大図絵』の文字情報の分析―」『歴史人類』四七号、二〇一九年、がある。

(4) 中西僚太郎・関戸明子編『近代日本の視覚的経験―絵地図と古写真の世界―』ナカニシヤ出版、二〇〇八年。

(5) 関戸明子「吉田初三郎の鳥瞰図」前掲註(4)、一一九～一二四頁。

(6) 寺嵜弘康「観光県かながわの誕生―神奈川県観光連合会の活動を中心に―」(神奈川県立歴史博物館編・発行『ようこそかながわへ―二〇世紀前半の観光文化―』二〇〇七年)。

(7) 山根真住編『山県治郎伝』山県治郎氏伝記編纂所、一九四〇年。「故山県治郎叙勲ノ件」(国立公文書館所蔵、「叙勲裁可書・昭和十一年・叙勲巻一・内国人一」)。

(8) 神奈川県観光連合会の動向については、前掲註(6)寺嵜論考を参照した。

(9) 「第一回委員会ニ於ケル知事ノ挨拶」神奈川県編・発行『外人招致に関する施設輯録』一九三一年、一三～二五頁。

(10) 『神奈川県観光連合会施設会務要録』神奈川県観光連合会、一九三一年、七～八頁(横浜開港資料館所蔵)。

(11) 前掲註(10)二四～二六頁。

(12) 『神奈川県観光連合会要録』神奈川県観光連合会、一九三二年、二四～二六頁。

(13) 一九三二年六月から一九三三年三月までの神奈川県観光連合会の動向は、特に断らない限り次の〔史料一〕及び〔史料二〕の記述に拠った。なお、／は改行を示し、〔　〕内の字句は筆者が補った。また、日誌は「神奈川県鳥瞰図」の作成に関連する部分を抄録した。

〔史料一〕「神奈川県鳥瞰図並ニ之ニ基クパンフレット調製経過」(『神奈川県観光連合会要録』神奈川県観光連合会、一九三三年、二四～二五頁)

本県、内外観光客招致上唯一ノ資料トシテ、本県鳥瞰図原図(副〔幅〕三尺、長三間)ノ揮毫並ニ之ニ基ク紹介宣伝用ノパンフレット(裏面ニ記事、写真刷入)一万二千部ノ刷成方ヲ昭和七年六月九日斯道ノ大家ニシテ其ノ創業者タル名古屋市外日本ライン蘇江、吉田初三郎氏ニ委嘱、同月十三日右鳥瞰図ヲ揮毫スルニ当リ、先ヅ県下観光地ノスケツチヲナス為吉田氏代前田虹映来庁アリタルニ付、本会藤原書記ノ案内ニテ同日ヨリ三日間ニ亘リ県下観光地ヲ実地踏査ノ上、右原図ノ揮毫ニ着手、其ノ完成迄約二ヶ月間ヲ要シ同年八月四日来着ニ付本会ニ於テハ之ガ内容ノ完璧ヲ期スル為、同年九月十三日開催ノ評議員会ニ於テ十分審査ヲ行ヒ、補正ノ箇所ニ付テハ適当ナル方法ヲ以テ明示シタル上、更ニ同氏ノ手ニ依リ補筆サレタリ。尚表紙ノ図案トシテハ昔ノ東海道ヲ背景トシタル旅姿ノ美女ノ絵ガ描ガカレ、本県ヲ表徴スルニ十分ナルモノ有リト認メラレタルニ付本会ニ於テハ之ヲ採用スル事ニ決定、パンフレットノ表面印刷ノ準備ニ着手セシムル一方表紙裏面ニ刷入スベキ県下英文交通図ノ作成ヲ進ムル外県下要塞地帯ノ模写、撮影、復〔複〕写等ノ承認方ニ関シテハ、殊ニ万遺憾ナキ様夫々手続ヲ了スルト共ニ諸般ノ事務的準備ヲ進メ、又一方パンフレット裏面記載ノ記事ハ本会高橋茂書記ノ手ニ依リ起草ニ着手シ、県下名勝旧蹟其ノ他関係資料ノ蒐集考証等ニ力ムルト共ニ専心之ガ脱稿ヲ急ギタルモ、何分広範囲ニ亘ル本県名勝旧蹟中ヨリ制限アル少数ノ文意ニ按分スル事ハ相当ノ苦心ヲ要シ、従ツテ予想外ノ時日ヲ費シタルモ極力之ガ脱稿ニ努メ、一方本会ノ手ニ依リ之ニ挿入スベキ数葉ノ写真ヲ撮影シ、昭和八年三月三十日準備完成、即日全関係物ト共ニ吉田氏経営ノ京都市内観光社印刷部宛発送四月中旬頃迄ニハ印刷出来ノ予定ナリ。

〔史料二〕「神奈川県観光連合会会務日誌」(同前、四五～五一頁)

昭和七年／六月九日　神奈川県鳥瞰図原図ノ揮毫並ニ原図ニ基クパンフレット刷製方ヲ吉田初三郎氏ニ依頼／六月十三日　曩ニ依頼中ノ本県鳥瞰図揮毫ノ為吉田氏(代)前田虹映氏来庁三日間ニ亘リ県下各地ヲ実地踏査／六月三十日　横浜貿易新報社主催『納涼名勝博覧会』ヘ県下観光交通図出陳／七月二十三日　神奈川県鳥瞰図原図揮毫促進ノ為吉田氏宛依頼状発送／八月四日　兼而揮毫依頼中ノ本県鳥瞰図完成清水超太郎氏持参／八月五日　曩ニ『納涼名勝博覧会』ニ出陳ノ県下観光交通図並ニ神奈川県鳥瞰原図ニ関シ要塞地帯模写承認方申請ノ為川島理事、高橋書記、東京湾要塞司令部、横須賀鎮守府ヘ出張／八月八日　右要塞地帯模写承認方申請ニ対シ夫々承認アリ／八月十一日　藤原書記同鳥瞰原図ヲ携帯右各所ニ出張検閲済ノ手続ヲ了ス／九月五日　神奈川県鳥瞰原図

ニ基キパンフレット印刷ノ件ニ付東京湾要塞司令官宛承認方申請／九月六日
県下英文地図調製依頼／九月九日　九月五日申請ノパンフレット印刷ノ件ニ付
承認アリ／九月二十日　同博覧会〔納涼名勝博覧会〕ニ出陳ノ交通図取片付ヲ
了ス／十月十日　神奈川県鳥瞰原図ノ修正並ニ上梓ニ関シ森川一郎氏ヲ吉田初
三郎氏宅ヘ派ス／十月二十七日　神奈川県鳥瞰原図ニ基キパンフレット印刷ノ
為原図再修正ノ上横浜各駅合同運送扱ニテ吉田氏宛発送／十二月十六日　神奈
川県鳥瞰原図ニ基キ印刷ノパンフレット表紙図案携帯清水超太郎来庁
昭和八年／二月十七日　曩ニ調製依頼中ノ県下英文地図出来／二月十八日　県
下英文交通図作成ニ関シ東京湾要塞司令官宛承認方申請／二月二十三日　曩ニ
申請中ノ英文交通図作成認可ニ関シ東京湾要塞司令官ヨリ承認アリ（昭和八年
二月二十二日東京湾要塞司令部地乙第四七号）／三月十四日　藤原書記英文交
通図携帯東京湾要塞司令部、横須賀鎮守府ヘ出頭検閲済ノ手続ヲ了ス／三月三
十日　本県鳥瞰図（パンフレット）裏面記事脱稿ニ付観光社宛発送

（14）資料上では「神奈川県鳥瞰図」を「原図」、「神奈川県観光図絵」を「パンフレット」と記載する傾向にある。しかし、「神奈川県鳥瞰図」は「神奈川県観光図絵」の原図（版下原稿）ではないため、本稿では「肉筆画」と表記する。また、従来の研究では印刷された鳥瞰図を「印刷折本」と表記する場合が多いため、本稿でもこれに従う。

（15）藤本一美「初三郎と同時代を生きた鳥瞰図絵師たち」『別冊太陽　大正・昭和の鳥瞰図絵師　吉田初三郎のパノラマ地図』平凡社、二〇〇二年、一一四頁。

（16）前掲註（7）、一五五～一五六頁。

（17）湘南公園道路建設の経緯については、次の論考を参照した。平野正裕「湘南公園道路の構想とその建設―戦前期の茅ヶ崎町と町政（三）―」『茅ヶ崎市史研究』一九号、一九九五年。

（18）山県治郎「都市計画と失業救済事業」『都市公論』一四巻一号、一九三一年、四～五頁。

（19）以下、一九三三（昭和八）年度の動向は、特に断らない限り次の記述に拠った。〔史料三〕「パンフレット『神奈川県鳥瞰図絵』完成」（『神奈川県観光連合会要録』神奈川県観光連合会、一九三四年、二〇頁）
本県、観光客招致上唯一ノ資料トシテ、予テ吉田初三郎氏揮毫ノ原図ニ基キパンフレット『神奈川県鳥瞰図絵』刷製ノ為、本会ニ於テ裏面掲載記事並ニ写真等ニ付鋭意之ガ脱稿ト蒐集ニ力メタル結果、三月三十日準備完了、即日全関係物ト共ニ同氏経営ノ京都市内観光社宛発送、一万二千部刷製方依頼中ノ処、四月二十一日完成到着、其後之ヲ各方面ニ配布シ宣伝ノ資料トナシツヽアリ。
〔史料四〕「神奈川県鳥瞰図絵」原図表装ト額縁（折畳式）作製（同前、三六頁）
各地博覧会、展覧会等ニ掲出宣伝ト保存上ノ利便ノ為、同鳥瞰図絵ノ表装並ニ之ニ用フル折畳式額縁ノ作製方ヲ昭和八年六月二十九日横浜市神奈川区反町鈴木忠治郎ニ依頼、同七月八日出来セリ。
〔史料五〕「神奈川県観光連合会会務日誌」（同前、六六～八〇頁）
昭和八年／四月六日　「神奈川県鳥瞰図絵」裏面ニ要塞地帯写真掲載ノ件ニ付其ノ筋ヘ承認方申請／四月同〔七〕日　四月六日附申請ニ係ル要塞地帯内写真複写ノ件ニ対シ東京湾要塞司令部地乙第八六号承認済／四月同〔八〕日　四月六日申請ニ係ル要塞地帯内写真複写ノ件ニ対シ横鎮第一四号ノ五五ノ二承認済／四月十二日　「神奈川県鳥瞰図絵」裏面記事校正ノ件ニ付京都市観光社宛打電／四月十六日　日曜ナルモ「神奈川県鳥瞰図絵」裏面記事到着ニ付之ガ校正ノ為高橋、藤原書記出勤校了ノ上即日京都観光社宛発送／四月同〔二十一〕日　予テ京都観光社ニ於テ刷製中ノ「神奈川県鳥瞰図絵」一万二千部到着／四月二十四日　全国土木学会員県下視察ニ際シ「神奈川県鳥瞰図絵」七十部寄贈方ニ関シ道路課ヨリ依頼アリタルニ付之ヲ贈呈ス／四月二十五日　県下観光地視察ノ為甲府商工会議所議員八名来庁ニ付同鳥瞰図絵並ニパンフレット等贈呈ス／五月二日　「神奈川県鳥瞰図絵」ノ件ニ関シ京都観光社田坂氏来庁／五月十九日横浜市主催関東市農会長協議会出席者五十名ニ対シ「神奈川県鳥瞰図絵」贈呈／五月二十日　神奈川県鳥瞰図絵売捌ノ件ニ関シ渡邊伝七氏外十七名ニ対シ文書発送／五月二十七日　大船芍薬観覧ノ領事団百二十名ニ対シ「神奈川県鳥瞰図絵」並ニマップ等ヲ贈呈／六月十九日　神奈川県鳥瞰図絵売捌依頼ノ為渡邊伝七氏外十二名ニ対シ計四千部発送／六月同〔二十九〕日　「神奈川県鳥瞰図絵」

原図表装並ニ之ニ用フル折畳式額縁作成依頼／七月八日　曩ニ作製依頼中ノ「神奈川県鳥瞰図絵」原図表装並ニ額縁出来／七月十三日　満洲博ニ於テ配布ノ為「神奈川県鳥瞰図絵」一千部発送／八月二十四日　本県農務課主催関東各府県副業主任会議出席者十九名ニ対シ「神奈川県鳥瞰図絵」並ニパンフレット等贈呈／十一月一日　キリスト教女子青年会幹部総会ニ際シ外人三十名ニ対シマツプ並ニ鳥瞰図絵等贈呈／十一月十日　内務省土木出張所長ニ鳥瞰図絵五部贈呈

(20) 武田周一郎「昭和初期の三浦半島小網代湾における初声御用邸計画について」『歴史地理学野外研究』一七号、二〇一六年。同「昭和初期の首都圏における御用邸の再編　初声御用邸計画に注目して」『年報首都圏史研究』二〇一六（六号）、二〇一七年。

(21) 『箱根温泉史　七湯から十九湯へ』箱根温泉旅館協同組合、一九八六年、一九二頁。

(22) 『土木学会誌』一九巻四号、二七・三一頁。

(23) 『土木学会誌』一九巻五号、四九頁。

(24) 前掲註（19）、史料五参照。

(25) 『土木学会誌』一九巻六号、六六～七五頁。

(26) 鉄道省熱海建設事務所編・発行『丹那トンネルの話』一九六～一九七頁。

(27) 『神奈川県観光連合会要覧』一九三四年、三七～三八頁。前掲註（6）、八三頁所収。

(28) 大連市編・発行『大連市催満洲大博覧会誌』一九三四年、六一九～六三二頁。

(29) この点について〔史料七・九〕の記述では、実際に吉田初三郎自身が来県したかどうかは判然としない。

(30) 以下、一九三四（昭和九）年度の動向は、特に断らない限り次の記述に拠った。〔史料六〕「国際産業観光博覧会ニ宣伝資料出陳」（『神奈川県観光連合会要録』神奈川県観光連合会、一九三五年、一八～一九頁）。昭和九年三月二十五日ヨリ五月二十三日迄、長崎市ニ於テ開催ノ国際産業観光博覧会開催ニ際シ県下観光宣伝ニ資スル為、同博雲仙第二会場ニ左記資料ヲ出陳展示ス。

◎出陳物

一、神奈川県大鳥瞰図絵／吉田初三郎氏揮毫ノ長サ二間、巾三尺ノ大絵画ニシテ組立式ノ額縁ヲ用ヒタルモノ

二、風光写真額（全紙版大）／横浜ニ渓園、横浜港、長谷大仏、鎌倉八幡宮、江の島、箱根芦の湖、箱根宮の下、ペリー上陸記念碑

〔史料七〕「パンフレット『神奈川県鳥瞰図絵』増版」（同前、四五頁）

曩ニ昭和八年四月吉田初三郎氏揮毫ノ原画ニ基キ本会宣伝資料トシテ高級パンフレット「神奈川県鳥瞰図絵」一万二千部ヲ印刷シ適当ナル方面ニ配布中ノ処、残部数僅少トナリタルニ付重テ増版スル為昭和九年八月二十五日同氏ノ来県ヲ乞ヒ、印刷上注意スベキ事項等ニ付協議ヲナシ、要塞地帯関係ノ手続ヲ了スルト共ニ、地図及記事ノ内容ト掲載写真等ノ訂正補填ノ箇所ニ付考究シ、原稿作製ノ上関係物ト共ニ同年九月三日同氏経営ニ係ル京都市観光社宛発送之ガ一万部印刷依頼中ノ処、同年十二月二十八日出来セリ。

〔史料八〕「風光絵画作成」（同前、六八頁）

本会宣伝資料ニ供スル為別記県下風光絵画（縦二尺五寸、巾一尺五寸）揮毫方ヲ、吉田初三郎氏ニ委嘱中ノ処昭和十年二月四日完成到着ス。

『春の江之島』『夏の宮之下』『秋の仙石原』『冬の鎌倉』『神奈川県庁』

〔史料九〕「神奈川県観光連合会々務日誌」（同前、七一～八四頁）

昭和九年／四月二日　精神作興会ニ出席ノ県下小学校長十二名ニ対シ「神奈川県鳥瞰図絵」贈呈／四月十一日　国際産業観光博覧会雲仙会場ニ出陳ノ為「神奈川県鳥瞰図絵」原図並ニ県下風光写真額七枚発送／四月二十四日　本県主催日本耕地協会関東一府六県総会出席者四十名ニ対シ「神奈川県鳥瞰図絵」並ニ県下観光地パンフレット等贈呈／七月五日　国際産業観光博覧会雲仙会場ニ出陳中ノ本会鳥瞰原図並ニ風光写真額等来着／七月同〔二十七〕日　内務省警察講習所生徒二百名県下視察ニ際シ本会ヨリ鳥瞰図絵贈呈／八月二十五日　「神奈川県鳥瞰図絵」増版並ニ風光絵葉書原画揮毫ニ関シ協議ノ為吉田初三郎氏宛来県方依頼状発送／九月三日　「神奈川県鳥瞰図絵」一万部増版依頼／九月同〔三〕日　同図絵増版ニ際シ要塞地帯模写ニ関シ東京湾要塞司令部、横須賀鎮守府宛

承認方申請／九月同〔五〕日　「神奈川県鳥瞰図絵」増版ニ関シ横須賀鎮守府ヨリ承認アリ／九月十日　「神奈川県鳥瞰図絵」三百部ヲ県経理課ヘ実費ヲ以テ頒布ス／九月十二日　「神奈川県鳥瞰図絵」印刷初校来着／十月十六日　鳥瞰図絵調製費ノ件ニ付佐賀県ヨリノ照会ニ対シ回答ヲ発ス／十一月二十七日　満洲国実業団三十名来県ニ際シ鳥瞰図絵、英文案内、絵葉書等贈呈／十二月十四日　予テ印刷依頼中ノ「神奈川県鳥瞰図絵」送付方ニ付京都観光社宛打電／十二月二十八日　予テ印刷依頼中ノ「神奈川県鳥瞰図絵」一万部出来

昭和十年／一月十一日　曩ニ出来ノ「神奈川県鳥瞰図絵」検閲ヲ了スル為東京湾要塞司令部、横須賀鎮守府ニ各六部ヅヽ発送／一月三十一日　絵葉書原図タル風光絵画出来

(31) 国際産業観光博覧会協賛会編・発行『長崎市主催国際産業観光博覧会協賛会誌』一九三五年、六頁。

(32) 以下、一九三四（昭和一〇）年度の動向は、特に断らない限り次の記述に拠った。

〔史料一〇〕「箱根観光博覧会ニ宣伝資料出陳」（『神奈川県観光連合会要録』神奈川県観光連合会、一九三六年、一九～二〇頁）。

昭和十年四月十日ヨリ六月七日迄六十日間、箱根湯本ニ於テ開催ノ箱根観光博覧会ニ際シ本県観光地ノ紹介宣伝ニ資スル為左記資料ヲ出陳展示ス。

記

一、神奈川県鳥瞰図（一個）／吉田初三郎氏ノ揮毫ニ係ル（幅三尺、長二間）

原図

二、風光絵画（五枚）／春の『江之島』夏の『宮之下』秋の『仙石原』冬の『鶴岡八幡宮』『神奈川県庁舎』

三、風光写真額（十枚）／『江の島全景』『大山より相模灘を望む』『津久井渓流』『芦の湖、駒ケ岳全景』『三渓園』『山下公園と桟橋附近』『長谷大仏』『鶴岡八幡宮』『湘南海岸』『真鶴三ツ石附近』

〔史料一一〕「神奈川県観光連合会々務日誌」（同前、九四～一一五頁）。

昭和十年／四月同〔九〕日　横浜商工会議所ヨリ横浜市内地図千部、同市鳥瞰図絵、絵葉書各五百部寄贈アリ／四月同〔九〕日　箱根観光博覧会ニ県下風光写真額十枚、鳥瞰図原図、絵画五枚出陳展示ス／四月同〔十〕日　宣伝用トシテ神奈川県鳥瞰図絵、冊子「こゝの国振」各五十部ヲ箱根振興会宛送附／四月十二日　関東蚕業取締所長会議出席者四十名並ニ蚕糸業連盟総会出席者六〇名ニ対シ神奈川県鳥瞰図、絵葉書、冊子「こゝの国振」等贈呈／四月同〔十九〕日　横浜復興大博覧会々場内ニ於テ観光デー挙行ニ際シ来賓配布用トシテ横浜市電気局ニ神奈川県鳥瞰図絵四百部贈呈／四月二十五日　復興記念横浜大博覧会神奈川館来賓十五名ニ対シ絵葉書「鳥瞰図絵」等贈呈／四月同〔二十五〕日　本県主催全国県会議長会議出席者百三十名ニ対シ「鳥瞰図絵」贈呈／四月三十日　関東東北桑苗組合連盟会総会出席者四十五名ニ対シ「鳥瞰図絵」並ニ「こゝの国振」等贈呈／五月一日　横浜市主催全国産業協議会百十名ニ対シ本県「鳥瞰図絵」頒布／五月三日　横浜市主催全国都市産業協議会百十名ニ対シ本県鳥瞰図絵、絵葉書、英文案内等贈呈／五月四日　横浜市主催全国市長会議出席者二百五十名ニ対シ本県鳥瞰図絵頒布／五月六日　本県山林会会合出席者六十五名ニ対シ鳥瞰図絵頒布／五月七日　本県主催全国港湾関係者会合ニ際シ出席者ニ配布ノ為本県河港課ニ対シ鳥瞰図絵千四百部を実費ヲ以テ頒布ス／八月十五日　全国工業専門学校化学担任教官協議会出席者四十名ニ鳥瞰図絵贈呈／十一月二十三日　東京警察講習生八十名箱根方面ニ旅行ニ際シ鳥瞰図絵贈呈

昭和十一年／二月同〔七〕日　鳥瞰図絵委託販売代金納入方ニ関シ関係先ヘ依頼状発送／二月十四日　湯河原町富士屋旅館ヨリ鳥瞰図絵委託販売々上金納入アリ

(33) 前掲註(21)、三〇四～三〇九頁。